

日本博京都府域展開アート・プロジェクト|もうひとつの京都

京都:Re-Search 2019

実施報告書 発行 = 京都:Re-Search 実行委員会

ごあいさつ

Introduction

京都府内では交流人口の拡大、地域の活性化へ繋げるさまざまな取組を行っています。

その一つとして、アーティストが一定期間滞在し、地域で制作を行うアーティスト・イン・レジデンス事業「京都:Re-Search」、「大京都」を実施し、地域が本来持ち得ているポテンシャルやその魅力をアートの視点から引き出すことを試みています。

2019年度は8月から9月にかけて、和東町内で「京都:Re-Search 2019 in 和東」を実施しました。

そして10月、京丹後市内で「京都:Re-Search 2018 in 京丹後」のリサーチをもとにした展覧会「大京都 2019 in 京丹後～風景泥棒～」を、2020年3月には、亀岡市内で「京都:Re-Search 2018 in 亀岡」のリサーチをもとにした展覧会「大京都 2019 in 亀岡～移動する有体～」を開催（新型コロナウイルス感染症の拡大防止のため中止）しました。

1月には京都文化博物館にて、京都:Re-Searchフォーラム2019「アートプロジェクトと観光地域づくり」を開催しました。今年度のフォーラムでは、インバウンド着地型観光の起爆剤として、現代アートを用い地域資源や観光資源を活かした大規模なアートプロジェクトが増える中、本取組のような小規模な現地制作型イベントにおいてどのようなタイプの現代アートがその目的に適しているかについて議論を深めました。

※アーティスト・イン・レジデンスとは

芸術制作を行う人物を一定期間ある土地に招聘し、その土地に滞在しながら作品制作を行うチャンスを提供する事業のこと。日本国内ではアーティストの育成や支援だけでなく、空き家・商店街の空き店舗を活用した地域振興や人の交流による地域活性の手段として用いられている。



目次 | Contents

- P.02 はじめに
- P.05 リサーチの流れ
- P.06 京都:Re-Search 2019 in 和東
2019年8月26日〔月〕－9月8日〔日〕
- P.12 大京都 2019 in 京丹後
風景泥棒 | Landscape Rippers
2019年10月11日〔金〕－14日〔月・祝〕
18日〔金〕－20日〔日〕
25日〔金〕－27日〔日〕
- P.30 大京都 2019 in 亀岡
移動する有体 | Moving tangible
- P.32 京都:Re-Searchフォーラム 2019
「アートプロジェクトと観光地域づくり」
2020年1月11日〔土〕



リサーチのながれ

How to Re-Search



リサーチ「京都:Re-Search」

京都府内外で活動するアーティストはもちろん、工芸家、デザイナー、建築家など、クリエイティブな分野で活動している人が府内市町村に短期滞在しながら、各自が設定したテーマに沿って、地域の風土や歴史等を調査し、そこでの発見を活かしたアートプロジェクトや作品プランの構想を作成し次年度の実現を目指します。

京都:Re-Search 2018 in 京丹後

2018年 8月20日[月] - 9月2日[日]

京都:Re-Search 2018 in 亀岡

2019年 2月25日[月] - 3月10日[日]

京都:Re-Search 2019 in 和束

2019年 8月26日[月] - 9月8日[日]

展覧会「大京都」

京都府内各地で行われたリサーチをもとに、地域の新しいアートドキュメント(=記録)作品を制作・発表します。約2ヶ月間におよぶ滞在制作と、そのプロセスを実施市町村内の各所で公開し発表、広く住民が文化芸術に触れる機会を創出し、住民の新たな文化芸術創造につなげる拠点を構築します。

大京都 2019 in 京丹後

風景泥棒 | Landscape Rippers

2019年 10月11日[金] - 14日[月・祝]
18日[金] - 20日[日] / 25日[金] - 27日[日]

大京都 2019 in 亀岡

移動する有体 | Moving tangible

新型コロナウイルス感染症の拡大防止のため
中止させていただきました。

大京都 2020 in 和束

2020年
開催予定



京都府
アーティスト・イン・
レジデンス事業

京都：

Kyoto Artist
in Residence

Re-Search 2019

in 和東

Kyoto:Re-Search
2019
in Wazuka

京都:Re-Search 2019 in 和東

8月26日から14日間、京都府内外で活動するアーティストが市内に滞在し、各自が設定したテーマに沿って、和東町の風土や歴史等を調査し、そこでの発見を活かしたアートプロジェクトや作品プランの構想をして、次年度にそのプランの実現を目指します。また、その記録をデータ化し、アートの視点による新しいドキュメントを作成します。

国際的に活躍するアーティストやキュレーターたちから、リサーチの手法やアートプロジェクトの作り方を学ぶワークショップやフィールドワーク、参加者の調査へのアドバイスを受けました。



開催概要

開催期間

2019年 8月26日[月]~9月8日[日]

滞在場所

京都府相楽郡

和東町大字湯船

小字岩倉

「湯船ヴィレッジハウス」

講師

Yukawa-Nakayasu

(アーティスト)

Gong Jow-Jiun

(台湾ビエンナーレ2018キュレーター)

藤井 光

(アーティスト/映像作家)

参加アーティスト

池上 綾乃 / 浜田 薫 / 嶋田 晃士

徐 裕真 / 牧嶋 平 / リバクリストフ

ホームページ

kyoto-research.com/wazuka2019

プログラム

8月26日[月] 15:00-

ガイダンス及び
ゲストアーティストとの交流会
会場 和東町内

講師 Yukawa-Nakayasu

8月27日[火]

フィールドワーク、その後参加者からの
プレゼンテーションとゲストア
ーティストによるアドバイス

アートプロジェクトや作品プランを組み
立てて行くためのヒントとなる、和東町内
の場所(現地)をゲストアーティストと実
際に調査しながら巡ります。フィールドワ
ーク終了後には参加者からのプレゼン、そ
れに対するゲストアーティストからの様々
な意見やアドバイスをいただきます。

8月28日[水]-8月31日[土]

各自リサーチ 期間

計4日間

9月1日[日]

ワークショップ1
「地域とアートプロジェクト」※1
講師 Gong Jow-Jiun

9月2日[月]

参加者による中間報告会及びゲスト
アーティストによるアドバイス
講師 Yukawa-Nakayasu
ワークショップ2

「折り返しディスカッション」※2
講師 藤井 光×Yukawa-Nakayasu

9月3日[火]-9月6日[金]

各自リサーチ 期間 計4日間

9月7日[土]

講評会及び活動報告展
ゲストアーティスト Yukawa-Nakayasu

9月8日[日]

参加者の活動報告展

※1 本プログラムでのワークショップとは、情報の交換や共有のみならず、アイデアの出し合いやディスカッションを繰り返す、各自が設定したテーマに沿ったアートプロジェクトや作品プランの実現に向けた戦略や施策などを固めていくものです。

※2 次年度、本プログラムで提案されたアートプロジェクトや作品プランをもとにした展覧会を伴うアーティスト・イン・レジデンス事業「大京都2020 in 和東」の開催を和東町内で予定しています。

池上 綾乃
IKEGAMI Ayano

「東京と違う生活、プログラム内容や目的を意識しながらのリサーチなど、慣れないことばかり。リサーチ前は幽霊になろうとしたが、なかなか難しかった。しかしメンバーや住民との対話で、得るものは大いにあった。」



今回のリサーチテーマ
《家と人》

湯船地区では一人暮らしの80代の女性から、原山地区では60代の男性から、それぞれの家とそこに住む人の話を聞いた。家

庭の事情から日本の将来に対する不安を感じ、今後もこのリサーチを続けていきたいと思っている。

嶋田 晃士
SHIMADA Kohshi

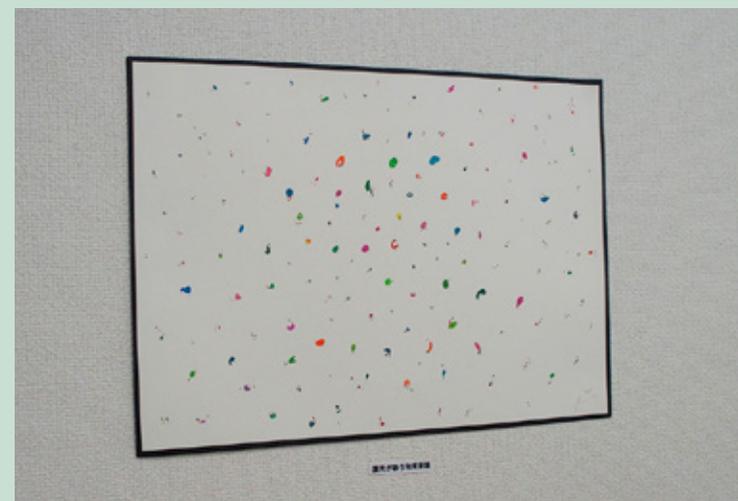
「2週間という短い期間で焦りもあった。しかし『アーティストとして調査する』というミッションを元に、私は地域に生活する人たちのコミュニティに介入し、そこに生活する人たちとコミュニケーションを行った。」



今回のリサーチテーマ
《水車をつくるプラン》

リサーチを進めていくうちに、和東に昔あった音を再制作するという目的で、精米をするための水車を地域の人と一から作り直

し、その様子を記録した映像作品を制作したいと考えている。来年までに客観的に考え直したい。



今回のリサーチテーマ
《Cadmium》

湯船地区のガソリンスタンドで、生えている植物はそのままに、グラフィティや色彩のある人工物をつくり、人の行為と自然現象の境

界を探りたい。また、幼稚園児が歌う「和東音頭」をベースにした作品も制作したい。

渋田 薫
SHIBUTA Kaoru

「以前から興味があったお茶、その産地である和東に伝わる歌や音楽を探りたかった。人と話をしたり、天空カフェまでいろんな道をたどったり、他のアーティストと情報交換をすることで、貴重な体験ができた。」



今回のリサーチテーマ
《個人史を通じた、時代背景や地域文化》

湯船地区に多い「前田」姓の、一人暮らしの女性3人にインタビューをした。個人史を通じて、時代背景や地域文化を知りたかつ

た。膨大なインタビュー映像は、様々な観点でまとめていき、室内と屋外で展示をしたい。

徐 裕眞
SEO Yujin

「和東の住民にとって、他の国から和東に来た私は部外者の部外者として参加し、そんな私を珍しく見てくれた。お互いの文化を理解する努力も必要だったが、人間と人間の間をつくるのが大切だと私は分かった。」



牧嶋 平
MAKISHIMA Osamu

「取材のやりかた、場所や時間、その必要性について反省的に学んだ。私自身『答え(根拠)』をしていたために、内容を受け入れることに多少時間が掛かった。しかし制作の可能性を広げることができた。」



今回のリサーチテーマ
《道、獣、生活をめぐって》

事前のテーマ設定にこだわらず、「道をめぐって- 恭仁京東北道、木津川水運、そして現代の峠道」、「獣をめぐって- 狩猟および有害捕獲」、「生活をめぐって- 谷間狭小地に暮らす心象」の3項目をリサーチした。

リバクリストフ
RIVA Christophe

「自分に無関係な土地に足を踏み入れ、関係があるようにするにはどうしたらいいかを考えた。役場の方々と共に考える機会を持ったり、アーティストと一緒に生活して、意見を出し合い、お互いに影響し合えた。」



今回のリサーチテーマ
《無関係から、関係の構築》

和東の役場の方々アイデアを出しつつ、何が可能かを共に考える機会が持てた。これまで制作してきたストリートアートやグラフィティをベースに、街の人の似顔絵を描いた。今後も自分が面白いと思ったり、興味のある作品を制作したい。

プロフィール
Profile

Yukawa-Nakayasu

ユカワナカヤス

アーティスト

1981年大阪生まれ。大阪を拠点に国内外で歴史や習俗や習慣をもとに、社会や身体、日常に内在している営為を視覚化する作品を制作発表を続けている。2018年にThe 12th Arte Laguna Prize 大賞受賞(Arsenale, ヴェネツィア)、2017年に『Japanese Connections』(Nikolaj Kunsthal, コペンハーゲン)など。近年では、2019年『間合いの良さ』(大阪府立江之子島文化芸術創造センター、大阪)、2020年『ポストLCC時代のサイトスペシフィックアート(仮称)』(京都芸術センター、京都)とキュレーションを手がける。また2019年7月からアートハブTRA-TRAVEL(北加賀屋、大阪)をアーティストQenji Yoshidaと共に立ち上げ活動する。

龔卓軍

Gong Jow-Jiun

台湾ビエンナーレ2018キュレーター

1966年台湾生まれ。国立台南芸術大学視覚芸術学院准教授。2009年より、季刊美術誌「Art Critique in Taiwan (ACT)」の編集長に就任。2011年には全国出版大賞優秀賞を受賞。2013年よりキュレーション活動を開始し、台北のEslite Galleryにて『Are We Working Too Much?』を企画。2014年に台北鳳甲美術館で開催された第4回台湾国際映像芸術展では、高森信男と共同でキュレーションした『The Return of Ghosts』を発表。2017年には『近未来的交陪』(蕭壩文化園區、台南)の主任キュレーターを務め、台新芸術賞を受賞。2018年には『台湾ビエンナーレ2018 Wild Rhizome』(国立台湾美術館、台中)のゲストキュレーターを務めた。

藤井 光

FUJII Hikaru

アーティスト/映像作家

1976年東京都生まれ。芸術は社会と歴史と密接に関わりを持って生成されるという考え方のもと、様々な国や地域固有の文化や歴史を、綿密なリサーチやフィールドワークを通じて検証し、同時代の社会課題に回答する作品を、主に映像インスタレーションとして制作している。近年では、『爆撃の記録』(東京都現代美術館「MOTアニュアル 2016 キセインノセイキ」展)、『南蛮絵図』(国立国際美術館「トラベラー まだ見ぬ地を踏むために」展)、『第一の事実』(森美術館「カタストロフと美術のちから」展)、日産アートアワード2017でグランプリとなった『日本人を演じる』など。

池上 綾乃

IKEGAMI Ayano

埼玉県在住。東京藝術大学芸術環境創造分野修了。2018年度、同大学国際芸術創造研究科教育研究助手。在学時にトビタテ留学JAPANの支援を受けて英国ウェールズに滞在。近年は、庭、植物、家、死生観、物語に関心を持つ。

嶋田 晃士

SHIMADA Kohshi

京都府向日市出身。美術大学在学中から「音」を用いた表現に興味を持ち、民族楽器をモチーフにしたサウンド・スカルプチャーを制作。電子機器やコンピューターを利用し、複合的にメディアを用いた作品制作を行う。www.kohshi-shimada.net

渋谷 薫

SHIBUTA Kaoru

Kanebo Make-up Institute, Pan Make-up School 卒業。クラシック曲をベースに、複数の音楽や自然音を表現するビジュアルアートに取り組む。世界各地のアーティスト・イン・レジデンスで制作、発表、ライブパフォーマンスを行う。http://instagram.com/shibuta_arts

徐 裕眞

SEO Yujin

2012年より、韓国で、美術の作業と芸術教育の活動をしている。https://suj510.wixsite.com/seoyujin

牧嶋 平

MAKISHIMA Osamu

埼玉県出身、京都府在住。西へ西へ。町にまぎれながら、旅になじませながら、抽斗をひっくり返してはまた詰め込む日々。

リバクリストフ

RIVA Christophe

フランスと日本の国籍を持つ若手アーティスト。ストリートアートを題材に様々な手法で表現を試みている。中国にも滞在経験があり、独特な視点を持って活動中。

大京都 2019 in 京丹後

「京都:Re-Search 2018 in 京丹後」でのリサーチをもとに、アーティストによる地域の新しいアートドキュメント(=記録)を作成する『大京都 2019 in 京丹後』を開催しました。

参加アーティストは、「京都:Re-Search 2018 in 京丹後」への参加アーティスト5名と、昨年度講師として招き、京丹後を共にリサーチしたSIDE CORE をゲストアーティストに迎え、約2ヶ月におよぶ滞在制作と、そのプロセスを京丹後市内各所で公開し発表しました。

風景泥棒

Landscape Rippers

なにやら怪しげな響きですが、実際に何かを盗むわけではありません。今回私たちの意味する風景とは「目で眺める景色」だけではなく、人の営みや文化、歴史もその土地の風景であると考えました。展示をするアーティスト達は、そのような広義の風景を調査/介入し、「風景を変化させる」ことをアイデアとして作品を制作します。当たり前に見える日常の風景が、作品鑑賞をきっかけに「全く違ったものに見えてしまう」ということがあります。そのような人が風景に向ける「眼差しの転換」を「盗む」と形容しました。転換された眼差しは、全く異なる場所の景色を見るときにも影響します。目に映る風景がまるで誰かの絵の中の世界に感じたり、壁の落書きが見知らぬ外国の土地を思い起こさせたりという体験です。是非ともこの京丹後で盗まれた風景を、あなた自身の目に焼き付け(インストール)に展示会に遊びにきてください。それは京丹後に暮らすみなさんにとって新鮮な目で街を再発見するきっかけになるかもしれませんし、初めて京丹後を訪れる方々にとっても、自分自身の街をみる眼差しを転換するきっかけになればと考えています。展示は京丹後の近代化を象徴するちりめん織の名家「吉村商店」の巨大工場跡、そして同社の文化遺産「桜山荘」にて開催されます。普段立ち入ることができない特別な場所を見る機会にもなります。是非とも高覧ください。

開催概要

開催期間

2019年10月11日[金]–14日[月・祝]
18日[金]–20日[日]
25日[金]–27日[日]

9:00–17:00

※12日[土]は台風19号接近のため中止

展示会場

吉村機業(株)旧織物工場/
桜山荘 他

参加アーティスト

石毛 健太 / 高橋 臨太郎 /
田中 良佑 / 前谷 開 / 鷺尾 伶

ゲストアーティスト

SIDE CORE

招聘アーティスト

パスカル・アンペール

プログラム

『ギャラリーツアー&公開トーク』

10月18日[金] 13:30

『アーティスト×キュレータートーク』

10月18日[金] 18:00

和多利浩一×SIDE CORE×
参加アーティスト

京都市内会場=VOU/棒

〒600-8061

京都府京都市下京区筋屋町137

TEL=075-744-6942

『アーティストと共に作品鑑賞、
公開トーク』

10月13日[日] 13:30 / 15:00 (2回)

『展示ツアー /

クロージングパーティー』

10月26日[土]

主催

京都:Re-Search実行委員会
(京都府、京丹後市ほか)

協力

荒山未来塾
一般社団法人京丹後青年会議所
舞鶴海上保安部
ネイチャークラブハウス
FMたんご
ガラシャ荘
琴引浜鳴き砂文化館
琴引浜の鳴り砂を守る会
山川産業株式会社
京都府織物・機械金属振興センター
丹後織物工業組合
梅本農場
株式会社吉村商店
吉村機業株式会社
VOU/棒



石毛 健太
ISHIGE Kenta

荒れ野の声 AM / FM

2019年
映像、AM/FM音声、
漂着物、ラジオ
15分



白い巨大な展示台の上に漂流物が置いてあります。よく見るとそれらは日本の漂流物以外にも、韓国や中国の物が多くあることがわかります。

この作品は「荒れ野の声 AM/FM」というタイトルですが、ここで聞こえている音声は、京丹後で採取した漂流物同士をパーツとして繋ぎ合わせて石毛が作り出した「漂流物ラジオ」から発信されています。また流れている音声は、石毛がパーソナリティとなって「FMたんご」で番組を放送した会話の内容です。この作品は「琴引浜鳴き砂文化館」にて展示されている、韓国から流されてきたラジオから着想を得ています。

一時期の間、韓国から北朝鮮に向けて大量のラジオが漂流されましたが、そのいくつかが日本海を超えて京丹後に流れ着きました。ラジオは韓国政府が北朝鮮に暮らす人々に、民主主義を呼びかける放送を届ける為に漂流されていたのです。

このような情報による韓国から北朝鮮への呼びかけはバリエーションに富んでおり、本

作品のタイトルとなっている「荒れ野の声」も、韓国のコーナーストーン宣教会が北朝鮮に向けて発信する短波ラジオ放送の名称で、これも日本海の対岸地域でも受信することができます。

漂流物のラジオ、漂流してくる音声、石毛は「見えない相手に送られたメッセージ。それを関係ない第三者が受け取ってしまうこと」の「行き違い」に興味を持ちました。まるで誰かのメッセージ・ボトル（ガラスのボトルに手紙を入れて漂流させたもの）を拾ってしまうように、「行き違い」は私達を少しドキドキさせます。

そのドキドキの正体とは私達を知らない世界への想像力を掻き立てること、つまり非日常へと誘う予感なのです。石毛はゴミでしかない漂流物を、作品を通じて「新しい想像力を開く為の装置」に変えているのです。





高橋 臨太郎
TAKAHASHI Rintaro

Mezzo scratcher

2019年

映像、スピーカー、
シンセサイザー、
ちりめん反物、紋紙
17分37秒



今は使われなくなった織り機が並ぶ部屋で、映像作品と丹後ちりめんが展示されています。それに加え中二階はステージのようなバンドセットがセッティングされています。映像を見れば忙しく織機が稼働する工場内で、高橋と吉村機業の工場長である矢谷さんが向かい合い、互いのキーボードに手を伸ばし演奏をしている様子が映っています。

ギタリストでもある高橋はちりめん織を音の観点から切り取り今回の作品を発想しました。中二階からは巨大な音が聞こえますが、実際に工場の織機の音は凄まじく、慣れていなければ数分そこにいるだけで辛くなる程です。しかしかつての京丹後では多くの人が織機を所有していたことから常に町中を音が鳴り響いており、住民達はその音に慣れ親しんでいました。

あまりにも日常と化していた為、織機の音が止むと子供が泣き出した程だといわれています。高橋の作品は「互い違いに、織機の音に合わせて音楽を奏でる」ことで、そのような街の中に記憶として存在するノイズと、現在流れている時間をキーボードのノイズ

によって不協和音(ポリリズム)として融合させています。また、互い違いにキーボードを演奏することは「そこに暮らしている人/外からきた人」など、様々なバックグラウンドの違いからコミュニケーションが円滑にできない「難しさの面白さ」を表現しています。高橋と工場長、そして織機が奏でるノイズともつかない演奏は音楽にも騒音にも聞こえます。しかし公害とも考えられた織機の音が心地よく聞こえるように、新たな心地よさを感じることができるのかもしれませんが。ロックンロールやテクノミュージックさえもかつては騒音とされていたように、人が音を嗜む歴史は常にノイズとの対話によって繰り返されてきたのです。高橋はこの街の風景、そして時代の流れをノイズミュージックによって切り取っているのです。

展示されている丹後ちりめんの作品は、高橋と工場長がセッションした音源を元にパンチカードを制作し、ジャガードによって織られています。高橋はピアノ鍵盤の配列とパンチカードの配列に類似性を見出し、本作を発想しました。丹後ちりめんがまるで楽譜のように音楽の記憶を宿しています。





田中 良佑

TANAKA Ryosuke

夜が嘆きに包まれても

2019年

映像、スチレンボード、
ガラシャ荘からお借りした肖像画
16分10秒



田中の作品は京丹後の味土野地区に幽閉されたというキリシタン「細川ガラシャ」伝説からインスピレーションを得て制作されています。映像には田中が「細川ガラシャの絵」を背負って暗い味土野の山奥を歩いているのが写されています。

絵の影が草木やコンクリートの地面に落ちて、寂しげな雰囲気を出していますが、どこか幻想的でもあります。映像では誰かが喋っている声が聞こえますが、これは田中自身が「歴史小説に書かれたガラシャのセリフ」と、味土野に現在暮らしている女性の言葉を音読している声です。

細川ガラシャは様々な歴史小説の中で、山奥で孤独と対峙する聖女として繰り返し題材として扱われてきました。また味土野という山村も、大積雪の末に元々の住民は全て集団移転してしまった過疎地域です。

田中はそのような味土野に一人の元シスターが移住していることを知り、味土野に長く滞在する他、ガラシャ伝説に関する歴史小説を調べ始めました。そして小説の中で描写

される「ガラシャの孤独」に、それぞれの著者の自己投影が重ねられていることに気がつきます。また、現在味土野に暮らしている女性の言葉にも、小説に描写されるガラシャの心象に重なる部分があると気がつきます。

この作品は、歴史小説におけるガラシャや元シスターの言葉を抜き出し、言葉同士を積み重ねることで「孤独とはなんであるのか?」ということについて考えるという内容です。

あくまで歴史上の人物に過ぎないガラシャですが、田中はガラシャの影を通じ、ガラシャと人々に時間を越えた対話をもたらしているのです。またタイトルの「夜が嘆きに包まれても」という言葉は、シスターの思い入れのある聖書の一節から引用されています。





前谷 開
MAETANI Kai

Scape

2019年
写真、カッパ



この空間に展示されている写真と、白い絹織物で作られた雨合羽、植物の生い茂る中庭に展示されている写真は、全て前谷の作品です。

京丹後の風景を撮影したこれらの写真は、どこか生々しい雰囲気を感じさせており、撮影する前谷自身の「身体の気配」を感じさせます。前谷は、何日もの時間をかけ京丹後を自転車で走り、そして道無き山道や海岸、人の気配のない場所まで丁寧に歩き回って撮影を行いました。そのように「丁寧に被写体に迫ること」が前谷の写真に生々しさをもたらせています。

自然が生み出す地形の形成過程は、人間の生きる時間の感覚を遥かに超えており、それを知覚することは非常に困難です。しかし、前谷は様々な場所を歩きながら「風景」の成り立ちについて思考し、普段意識することのない大きな動きを、写真によって想像させることを試みています。また展示されている合羽は、展示空間の外に広がる京丹後の土地へ飛び出していくような、前谷の行動性が表現されています。

今回の制作では「丹後震災記念館」との出会いが一つのインスピレーションとなっています。同館は、1927年(昭和2年)3月7日に起こった北丹後地震を記念して、1929年に竣工しました。しかし、90年の時を超え、老朽化による耐震性の低下を理由に現在は閉鎖されています。前谷は10月25日(金)18時～、震災記念館前の広場にてパフォーマンスを行いました。





鷺尾 怜 WASHIO Ray

sand and water

2019年

映像インスタレーション

11分41秒

企画協力: 山川産業株式会社



入り口には忙しく動く不思議な機械、中心には大きなプール、そして奥には入り乱れるように再生される映像があります。この不思議な機械は琴引浜の鳴き砂を人工的に生産する機械であり「琴引浜鳴き砂文化館」から正式に借りてきたものです。またプールは、7トンの海水で満たされており、上に乗っているのは琴引浜の付近で採取された鳴き砂に限りなく近いとされる砂です。バラバラに琴引浜の要素を持ってきて展示することで展示は奇妙な実験室のような体を成しています。

鷺尾は琴引浜の環境保護運動への関心から、風景（もしくは土地）を仕切っていくことや資源の分配について考察し今回の作品を制作しました。かつてはただの浜辺であった琴引浜は2007年に天然記念物に制定されることで保護対象となり、人を多く呼ぶ地域の観光資源となりました。そこで鷺尾が考えたのは、実際には「どこからどこまで琴引浜と定義できるのか」ということです。鷺尾は琴引浜鳴き砂文化館に通い、琴引浜の成り立ちについて調べていきます。そして実際には「浜辺」と呼べる部分は実はより大

きな地域で、植林された砂丘もかつては浜辺の一部であったということを知ります。しかしその部分は環境保護の対象ではありません。また鳴き砂は採取が禁止されている為、琴引浜鳴き砂文化館に展示されている鳴き砂は、砂丘など外から採取してきた砂を、展示されている機械で人工的に作り出したことを知りました。昔の琴引浜は京丹後の日常風景の一部であったはずですが、要素を分解していくことで研究を可能にし、定義をし、ルールを作り出して今その姿を保つことができています。鷺尾は今回、かつて鳴き砂を研究した人達が実行したように、琴引浜の要素を分解して展示会場に配置しています。

しかしそれは研究者のような科学的な観点ではなく、アートの観点から浜辺を切り取ってくる道具/素材に着目しています。海や川を模すプール、鳴き砂を作り出す機械、鳴き砂になり損ねた砂、そして琴引浜を写した映像。これらを琴引浜に関する要素を組合わせていくことで鷺尾は風景画ならぬ、風景彫刻として琴引浜をここに作り出しているのです。



SIDE CORE EVERDAY HOLIDAY SQUAD

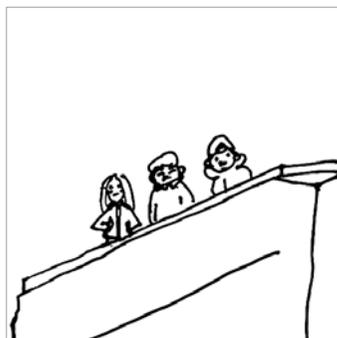
岬のサイクロプス

2019年

映像、壁画、土蔵

4分50秒

企画協力: 舞鶴海上保安部



真ん中で区切られた二つの空間があります。最初の空間に見えるのは山の形を模した土の室、そしてこちらを見ている巨大なキツネ、他にも夜の京丹後の風景や動物が描かれています。夜の丹後半島を車で走っていると出会うことができる風景が様々な作品化されていますが、これらは奥の部屋にある映像作品と関連しています。

奥の空間にある映像は、丹後半島の先端に明治時代に作られた経ヶ岬灯台、そのレンズを巨大な目に変化させるという内容です。歴史ある経ヶ岬灯台は京丹後の重要な観光資源であり、現役で船を誘導する役割を担っていることから、人々に「見られるもの」です。しかしかつて灯台は「見るためのもの」でもありました。具体的には過去には日本海の国防を担う監視所として、そしてレーダー基地として使われていたからです。

今回、灯台のレンズを巨大な目に変化させることは、その「見るためのもの」としての灯台を想起することを目的としています。しかし灯台が何かを見ていたとして、それは軍事的な内容に限定する訳ではありません。

灯台が建ってからこの街の100年間に様々な出来事があった筈です。それは、街の近代化から、第二次大戦、京丹後地震、そして復興まで、めまぐるしい歴史です。そのような「街を見守る存在」として灯台を考え、レンズに巨大な目を取り付けることで、灯台をギリシャ神話に登場する一つ目の巨人サイクロプスに例えました。

灯台のレンズや台座がフランス万博で購入されて来た1893年、フランスで活躍していた画家オディロン・ルドンは何枚ものサイクロプスの絵を描いています。サイクロプスはそれまで厄災の神とされて来ましたが、ルドンの描くそれは人間らしい内気な性格であり、自然や人を優しく眺めている姿が描写されています。そこでEVERYDAY HOLIDAY SQUADは「灯台が見ているもの」を題材に、夜に灯台を訪れる時に見た、風景や動物を絵や立体で表現しています。土の室は、灯台の光に照らされて光る実際の山をモチーフにしている他、中に入って穴から絵を見ることで、灯台から景色を見ていることを表現しています。





パスカル・アンベール
トウリー・ロリタ
Pascal Humbert /
Tree Laurita

EMMÈLEMENT

-もつれ-

2019年
映像インスタレーション、
旧織物工場内の廃材
16分48秒



工場の一角を利用した空間に写真や映像が配置され、または微かに音楽が聞こえてきます。写真や映像には京丹後でパスカルが撮影した断片的な風景が写されていますが、それはだれかの記憶を覗き見ているような不思議な懐かしさを感じさせます。映像はパスカルが撮影した素材をフランスにいるトウリーが編集したものです。

音楽はトウリーが完成させた映像を元に、さらにパスカルが作曲を施しました。パスカルとトウリーは夫婦のアーティストで、二人は現在フランスに暮らしており、フランス・オクシタニ州と京都府の文化交流プログラムの一環としてこの展覧会に参加しています。

パスカルは京丹後に来て、ちりめん織に興味を持ちました。それは長い時間をかけて一本一本の細い糸を丁寧に紡いでいく作業が、人と人の関わり合いを表し、そして町の中に歴史が流れていくのを思い起こさせたとパスカルは言います。

そのような経験を経て、パスカルは自転車で街を隈なく見て回り、自分自身が見た京

丹後の記憶を写真と映像に残しました。それを京丹後に訪れたことないトウリーが受け取り、映像を完成させ、トウリーの記憶に移し替えられます。パスカルが紡ぐ糸は、京丹後の街だけではなく遠くフランスの地に繋がりを、そしてまたこの場所に結びつけられているのです。

それは京丹後の街の記憶が一つの場所だけで形成されているのではなく、ほかの土地や国々に記憶と結びついて成り上がっていることを思い起こさせます。実際に京丹後の町の歴史を作る機織の技術について考えても、それは近代化によって流入したイギリスの産業革命と結びついています。パスカルの作品は、一見関係ない外国の地と京丹後の地、そして異なる場所に暮らす人々の記憶を作品によって繋げているのです。



記憶の解凍

2018年8月、真夏の京丹後で、SIDE COREと招聘アーティストたちに案内され、京丹後を訪れた日のことは忘れることができない。

うだるような暑さの中、最初に連れて行かれたのは、丹後ちりめんで知られる峰山町の「丹後震災記念館」だった。1927年（昭和2年）3月7日、丹後半島北部で最大震度6、マグニチュード7.3を記録した北丹後地震が発生。死者2,925人、負傷者7,806人の大災害であり、そのなかでも峰山町は住宅や織物工場など家屋の97%が焼失、人口に対する死亡率は22%に達するなど、最大の被災地となった。

震災記念館は、峰山町の市街地を見下ろす丘の上に建っていた。震災から二年後の1929年に竣工しているが、当時としては珍しい鉄筋コンクリート造で、一井九平設計の堂々たる近代日本建築である。しかし現在、この記念館の入り口は閉ざされている。なぜなら、老朽化により耐震面で問題があるとして、2012年4月から施設への立ち入りが禁止されているからだ。

ぼくたちは、建物の周囲を歩きまわり、できる限りこの記念館の全貌を見ようとしていた。すると、SIDE COREのtohryが北側のガラス窓を指差し、中をよく見るように、ぼくを促した。ガラスは古び、汚れて白く濁っていて、建物内の様子は鮮明には見えなかったが、かろうじて体育館のような講堂になっているようだった。さらに目を凝らすと、講堂の壁に、大きな絵画が3枚かけられていることがわかった。長い間、劣悪な環境に置かれていたせいで劣化した、灰色っぽいその絵は、洋画家の伊藤快彦が北丹後地震の様子を描いた「震災画」だった。

未曾有の震災を経験し、その悲劇を忘れぬようにと作られた、当時最高水準の建築と絵画が、氷漬けにされたまま眠っている。東日本大震災を経て、

黒瀬陽平

美術家／美術批評家

今こそまさに、北丹後地震の記憶に向き合わなければならぬぼくたちにとって、これほど齒がゆい状況はない。

それから1年がたち、京丹後を再訪して『風景泥棒』を見た。アーティストたちは、時間をかけて、この土地の記憶に向き合っていた。経ヶ岬灯台を使ったSIDE COREの《岬のサイクロプス》は、パリ万博で購入した灯台のレンズが、現在もそのまま使用されていることに着目し、京丹後から日本の近代化を考える傑作だった。

前谷開は自身の身体と写真を介して、京丹後の断層の記憶に迫ろうとし、高橋臨太郎の《Mezzo scratcher》は、かつてこの地に響き渡っていた織機の騒音、リズムを呼び出し、石毛健太の《荒れ野の声 AM/FM》は、今も京丹後の「外」から流れ着く漂流物や電波をつかまえようとする。

「鳴き砂」で有名な琴引浜の保全活動に着想を得た鷺尾怜の《sand and water》は、その土地固有のもの（名物）を生み出し、守ろうとする人工的な介入自体が、ある種の倒錯として固有性を喪失させる可能性を示唆し、京都:Re-Searchも含めた地域アートの活動へ批判的の眼差しを向ける。その鷺尾の眼差しに間接的に呼応するかのように、田中亮佑の《夜が嘆きに包まれても》は、京丹後7姫伝説の切支丹「細川ガラシャ」の足跡を追い、地縁から徹底的に切り離された「孤独」を追いかける。

『風景泥棒』展は、近年乱立が止まらない地方芸術祭、地域アートのなかでも、稀有なアプローチと成果であった言ってよい。しかし、この土地にはまだまだ、解凍されるべき記憶が眠っている。文化行政の宿命である「単年度決算」の時間軸、リズムでは決してとらえることのできない、深く、重く、豊かな記憶が。

石毛 健太

ISHIGE Kenta

美術家/インディペンデント・キュレーター/DJ

1994年 神奈川県生まれ。2018年 東京藝術大学大学院修士課程修了。物語の読み替えや都市論の再考等をテーマに製作する。「カーゴ・カルト in KENPOKU」(茨城・2017)「Escape from the sea」(クアラルンプール・2017)「変容する周辺 近郊、団地」(東京・2018)「生きられた庭」(京都・2019)

高橋 臨太郎

TAKAHASHI Rintaro

アーティスト

1991年 東京都生まれ。東京芸術大学大学院美術研究科後期博士課程在籍。パフォーマンスや音楽演奏等、自身の身体によって空間に働きかける表現をする。「スケール ヒア」(個展)(ブロックハウス 東京・2019)「そとのあそび展」(市原湖畔美術館、千葉・2018)

パスカール アンペール / トゥリー ロリタ

Pascal Humbert / Tree Laurita

パスカール・アンペール：ミュージシャン / 作曲家
1959年 パリ生まれ。フランスと米国で多くの音楽プロジェクトに参加。米国には22年間在住。長編映画の音楽と舞台音楽も作曲。

トゥリー・ロリタ：造形作家
1966年 米国カリフォルニア州カノガパーク生れ。メンバーに在任し、抽象絵画作品を展示。2011年にフランスに移住し、ビデオ作品も創作。

田中 良佑

TANAKA Ryosuke

アーティスト

1990年 香川県生まれ。東京都在住。東京藝術大学大学院修士課程美術研究科壁画専攻修了。「社会の中のそれぞれの『私』』という言葉を大切に、この世界で生きるそれぞれの人生の可能性を探る。「社会の芸術フォーラム展/躊躇」(2016)「国立奥多摩映画館」(2016)「西荻映像祭 2017-不可分な労働と表現-」(2017)「美学校・ギグメンタ2018/ 明暗元年」(2018)

前谷 開

MAETANI Kai

アーティスト

1988年 愛媛県生まれ。滋賀県在住。2013年 京都造形芸術大学大学院 芸術研究科表現専攻修了。自身の行為を変換し、確認するための方法として主に写真を使った作品制作を行う。「六本木クロッシング2019展：つないでみる」(森美術館 東京・2019)「六甲ミーツ・アート2016」(六甲山高山植物園 兵庫・2016)「ハイパートニック・エイジ」(京都芸術センター・2015)

和多利 浩一

WATARI Koichi

ワタリウム美術館キュレーター

1960年、東京都生まれ。ワタリウム美術館CEO。早稲田大学社会科学部卒業。1990年、ワタリウム美術館設立。1992年国際展「ドクメンタ9」で初の日本人スタッフとして参加。1995年、第1回ヨハネスブルグ・ビエンナーレの日本代表コミッショナー。東京都写真美術館の作品購入評議員、(公)岡本太郎記念芸術振興財団理事などを歴任。地域ボランティア活動として「原宿・神宮前まちづくり協議会」を発足させ、その初代代表幹事を務める。

プロフィール

Profile

鷺尾 怜

WASHIO Ray

アーティスト

1995年 東京都生まれ。京都市立芸術大学大学院美術研究科彫刻専攻在籍。日常生活で感じる作品の不要性を克服することによって生まれる違和感をテーマに制作を行う。「クロスポイント」(東京・2017)「大彫刻フェア」(京都・2018)「セコンドハンド」(東京・2018)

SIDE CORE

サイドコア

アーティスト

2012年から高須咲恵と松下徹により活動を開始。2017年より西広太志が加わる。美術史や歴史を背景にストリートアートを読み解く展覧会『SIDE CORE-日本美術と「ストリートの感性」-』(2012)発表後、問題意識は歴史から現在の身体や都市に移行し、活動の拠点を実際の路上へと広げている。「rode work」(Reborn-Art Festival 宮城県石巻・2017)「そとのあそび」(市原湖畔美術館・2018)

黒瀬陽平

KUROSE Yohei

美術家／美術批評家

1983年生まれ。ゲンロン カオス*ラウンジ新芸術校主任講師。東京藝術大学大学院美術研究科博士後期課程修了。博士(美術)。2010年から海沢和木、藤城嘘らとともにアーティストグループ「カオス*ラウンジ」を結成し、展覧会やイベントなどをキュレーションしている。著書に『情報社会の情念』(NHK出版、2013年)。

大京都 2019 in 亀岡

移動する有体

「大京都 2019 in 亀岡 ～移動する有体～」

は、新型コロナウイルスの感染症拡大の防止のため、参加者および関係者の健康・安全面を第一に考慮し、中止させていただきました。

移動する有体

私たちはこの世界を常に移動している。椅子に座っている時も、寝ている間も、留まることなく私という微細な有機物は、さっきまでいた位置から次の位置へと移動をし続けている。場所の本来性というものもこれと同じように、歴史的着地点とはまるで無縁なまでに、どこからかやってきてまたこの地を去って行く。そんな、どこか引き裂かれてしまいそうな過ぎ去ってしまう行為と引き換えに「みる」という行為はある。移動する導線の中で、この地や環境をこうでなくてもよかったはずの生々しい結果として受け入れてみたい。アーティストたちは、既存の本来性にとらわれることなく、この拮抗の空間を渡ってきた。ともすれば何事にも成らずに消えてしまうリアリティの中で「逆さの必然」として、この場所をみることができたらと思う。

目[mé] | 展覧会ディレクション/ゲストアーティスト

開催予定期間

2020年3月13日[金]-15日[日]/

20日[金・祝]-22日[日]

※金・土・日のみ

参加アーティスト

身体0ベース運用法 / 小野 峰靖 / 上岡 安里

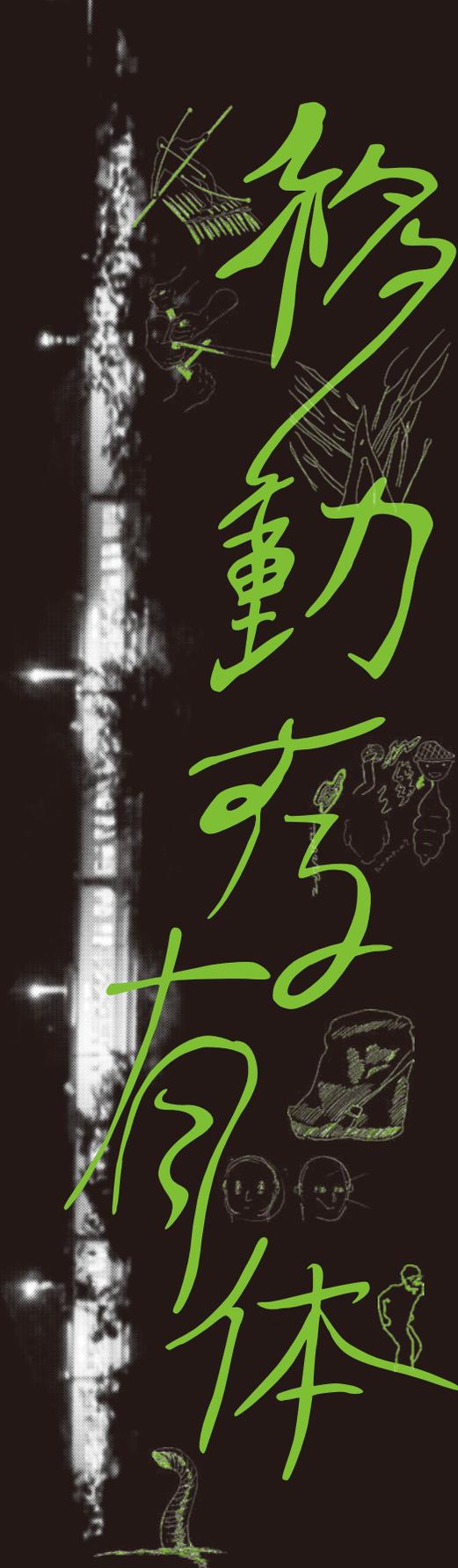
上川 桂南恵 / 倉科 明尚 / 武田 萌花 / 中谷 優希

ゲストアーティスト / 展覧会ディレクション

目[mé]

主催

京都:Re-Search実行委員会(京都府、亀岡市ほか)



プロフィール

Profile

上川 桂南恵

KAMIKAWA Kanac

東京藝術大学美術学部 先端芸術表現科 在籍

私にとって、絵を描くキャンパスの布や絵を描くことができるものすべては素材であり、それらは無表情なので、記号化されたマスコットキャラクターのように親しみやすく感じる。私はそれらに執着や魂を込めることでその素材の存在を確かめると同時に、その存在に自分自身の憧れを託している。

倉科 明尚

KURASHINA Akinao

東京藝術大学美術学部 先端芸術表現科 在籍

ドローイングを主体とした作品を制作している。最近はロトスコープの手法を使って押さないと進まないアニメーションに取り組んでいる。世界中でどうしようもないことが絶え間なく起きている。解決できないけれども何か言わないといけないという僕のフラストレーションが制作の動機になっている。

武田 萌花

TAKEDA Moka

東京藝術大学美術学部 先端芸術表現科 在籍

「都市と風景」をキーワードに、映像を用いたインスタレーション作品を制作している。京都Re:Searchでは、アーティストそれぞれの視点や地域とアートとの関係性、アーティスト・イン・レジデンスという構造をどこまで刺激的に拡張出来るかという所に関心があり、メディアム(媒介者)のような立ち位置を模索している。

中谷 優希

NAKAYA Yuuki

東京藝術大学美術学部 先端芸術表現科 在籍

人は生身では宇宙空間で生きることができません。しかし宇宙服に包まれることによって、宇宙に存在することができます。宇宙服のようなこの効果を「包むこと」から「Packing」と呼んでいます。「Packing」とは「そのままの状態ではある場所に存在できないものを、そこに存在させるためのツール」です。「Packing」=存在するための方法を用いて、わたしはここ亀岡に居るための方法を模索します。

目 [mé]

現代アートチーム

果てしなく不確かな現実世界を、私たちの実感に引き寄せようとする作品を展開している。手法やジャンルにはこだわらず、展示空間や観客を含めた状況、導線を重視。創作方法は、現在の中心メンバー(アーティスト荒神明香、ディレクター南川憲二、インストーラー増井宏文)の個々の特徴を活かしたチーム・クリエイションに取り組み、発想、判断、実現における連携の精度や、精神的な創作意識の共有を高める関係を模索しながら活動している。主な活動に、たよりない現実この世界の在りか/資生堂ギャラリー/東京、おじさんの顔が空に浮かぶ目/宇都宮美術館館外プロジェクト2014、Elemental Detection/さいたまトリエンナーレ2016、repetition window/Reborn-Art Festival/石巻、などがある。

身体 0 ベース運用法

Shintai 0 Base Unyoho

アーティスト

2009年京都市立芸術大学染織専攻修士課程修了。2016年より、作品の制作を通じて得た身体感覚や思想を発展させ、身体の使い方をゼロから見直すための実践《身体0ベース運用法》を考案、体験型インスタレーションの制作、発表やワークショップなどをおこなっている。

小野 峰靖

ONO Takayasu

アーティスト

今日の自分が何を忘れて、これから先何を忘れるのか把握できない境遇において、目の前の情景を無責任に物質化できる写真の機能を「忘失のメディア」とみなして取り扱っている。

上岡 安里

KAMIOKA Asato

金沢美術工芸大学美術工芸研究科修士課程 在籍

“今”自分自身の目の前でみているものの真偽がわからなくなることがあるだろう。ホントなのかウソなのか不確かさに戸惑う。実感を疑い実感から身体性を伴う実体感に繋げることが大事だと思い制作している。

アートプロジェクトと 観光地域づくり

交流人口の拡大、地域の活性化へ繋げる取組として、京都府はアーティスト・イン・レジデンス事業「京都:Re-Search」、「大京都」を府内各地で実施している。それぞれの地域が本来持ち得ているポテンシャルやその魅力を、アートの視点から引き出すことを試みる。

本フォーラムでは、インバウンド着地型観光の起爆剤として、現代アートを用いて、地域資源や観光資源を活かした大規模なアートプロジェクトが増える中、本取組のような小規模な現地制作型イベントにおいてどのようなタイプの現代アートがその目的に適しているかについて議論を深めていった。

見過ごされていた価値を「感じられるもの」に変換する能力に長けるアーティストとともに、そうした資源を生かすべく地域の多様な関係者と協働して、継続的・戦略的に施策（文化芸術の制作、展示や公演の支援）を行うことで、観光地域づくりを進展させていくという役割について考察していった。

開催日 2020年1月11日[土]
時間 13:30-17:00
会場 京都文化博物館別館

取組報告

日本博京都府域展開アートプロジェクト「もうひとつの京都」
報告者 八巻真哉（京都府文化スポーツ部文化芸術課）

第一部

講演1

「アートイベントによる地域イメージ調査の評価手法」
講師 金光淳（京都産業大学現代社会学部教授）

講演2

「メディアと社会、オルタナティブなメディアとしてのアート」
講師 山峰潤也（水戸芸術館現代美術センター学芸員）

第二部

パネルディスカッション

「アートイベントによる地域活性の接合」
パネリスト
SIDE CORE（アーティスト）
目|[mé]（現代芸術活動チーム）
モデレーター
田島悠史（一般社団法人MRS専務理事）

講演 1

アートイベントによる 地域イメージ調査の 評価手法

講師

金光淳

（京都産業大学現代社会学部教授）



社会学を元にして、経営学的な視点を加えた研究をしてきた金光氏から、まず、ブランド研究、ネットワーク解析などを手掛けてきたこと、そうした手法を使って、今はアートイベントやそのイメージ評価をしている、という自己紹介があった。

金光氏によると、ここ数年、地域でのアートイベントが目撃されたり、現代アートがビジネスに利くという本も多く出回っている、という。特に昨年あたりから、地域ブランディングにアートが入り込み、人との関わりやマーケティングも混ぜた、地域ブランディングの流れが生まれているそうだ。

金光氏自身の活動として、これまでリサーチした「瀬戸内国際芸術祭」で行ってきたことを事例として紹介。これらの会場で、地元の人たちおよび来場者に、日本語で「場所から連想されるイメージ」についてのアンケートを行った。場所からモノ、コト、

展示されている作品を聞き取り、その集計をつなげて数値化あるいはグラフ化していった。瀬戸内国際芸術祭では、小豆島と豊島の二会場で聞き取り調査を行った。小豆島については、産業のコンテンツが豊富で、アートに関する言葉は少ない。一方で豊島では、地元の人たちと来場者から出て来る言葉が異なることが分かった。このリサーチにより、アート（を見る）ことが目的で、その場所を訪れているかどうかの力が分かったとのこと。またインスタグラムから、ハッシュタグや画像に何が写っているかを解析し、アートイベントが何とつながっているかも調査している、という。

資本主義が変化し、コトに対する投資が盛んになっているいま、ビジネスはアーティストや創造的階級に期待をしている。今後アーティストがビジネスに入り込み、引っ掻き回すことをしてほしい、と金光氏は訴えた。

講演 2

メディアと社会、
オルタナティブな
メディアとしてのアート

講師
山峰潤也
(水戸芸術館現代美術センター学芸員)



これまでに東京都写真美術館や金沢21世紀美術館でも学芸員であった山峰氏。講演では、情報メディアの発達によって社会構造が大きく変化していったことに、アーティストがどのように呼応してきたかを取り上げた。

2011年に山峰氏が担当した東京都写真美術館での展覧会「見えない世界のみつめ方」では、科学写真の内容とその技術史を紹介。技術の発達で見える世界は変わり、人間が思い描く世界自体も変わっていく、という主旨だったという。

このような考え方を出発点に、山峰氏は1920年代のマスメディア論やマルチメディアの歴史と、そこにまつわるアートの状況を説明した。

メディアによってつくられていくステレオタイプにのみこまれないために、オルタナティブメディアをつくる。この発想から1960~70年代、ローカルのテレビ局をつくる、人々が撮影したビデオテープを交換し合うといったコミュニティ形成が広まっていった。同時代には、コンピュータを個人で扱えるものにした、世

界中の本を横断検索できる仕組みによって「知」を開放したい、という発想や、技術者とアーティストが協働したコミュニティがあった。さらに1990年代のインターネットの登場により、マスメディアとは異なる、脱中心的・非中央集権的で民主的な情報網の確立が期待された。

こうした流れを汲んだ、メディアアートだったが、テクノロジーが生み出す未来を期待させ、無自覚にテクノロジーのパワーで人々を誘引する(=プロパガンダやステレオタイプを生む)ようにもなった。山峰氏は、こうした側面を批判的にとらえながら展覧会をつくってきたという。

さらに山峰氏は近年、社会的テーマを扱った作品が増えるなかで、その実社会的に対する訴求力に疑義を呈しながら、アーティストックな社会的実践の可能性を述べた。インターネット環境を最大限に活用し、社会的実践を目指す台湾のシビックテックコミュニティや、インターネット上に上げられた写真や動画の解析から、発信する情報をリークする活動を行うコレクティブの例を挙げた。

パネルディスカッション

アートイベントによる
地域活性の接合

パネリスト
SIDE CORE (アーティスト)
目[[mé]] (現代芸術活動チーム)

モデレーター
田島悠史 (一般社団法人MRS専務理事)





モデレーターである田島悠史氏の自己紹介からスタート。田島氏は、一般社団法人MRSの専務理事として、文化芸術を使った地域に関わる仕事をしている。その傍ら、アーティストとしても活躍し、これまで「木津川アート」や「亀山トリエンナーレ」、「新宿クリエイターズ・フェスタ」に参加してきた。さらに田島氏が2009年からマネジメントする、茨城県ひたちなか市でのアートイベント「みなとメディアミュージアム」についての紹介があった。この「みなとメディアミュージアム」は、自治体からお金をもらい、行う形式のアートイベントではなく、田島氏や実行委員会が企業や組織への飛び込み営業でお金を集め、始めたアートイベントだという。そのため年間予算が、少ない時で約100万円、多い時で300万円程度で運営されており、アートに知見のある人たちが事務局運営を、アートに関心があり、東京近郊に住みながらひたちなか市へ通って来る人たちが実行委員会を構成している。会場である那珂湊エリアは、高齢化が進み、商店街もかなりシャッターが閉まっているような場所。しかし後援する鉄道会社や地域の団体、地域住民の協力を受

けたり、このエリアに引っ越して定住するアーティストや、地域住民と協働して作品制作をするアーティストもいるなど、できる限りの小さなことを一つ一つ積み上げて、アートイベントをつくっていく現状を伝えた。

続いて、パネリストのSIDE COREの松下徹氏は、2019年10月にゲストアーティストとして参加した展覧会「大京都 2019 in 京丹後～風景泥棒～」の話をした。京丹後市は、かつて丹後ちりめんの産地として栄えた町である。前年度、SIDE COREは参加アーティストと共に京丹後市内のリサーチをし、今年度、彼らとフランスからの招聘アーティストは、リサーチを元にして作品を制作、織物工場だった場所で展覧会を開いた。例えば、田中良佑は市内の味土野地区に伝わる「細川ガラシャ」伝説を元にした歴史小説を集め、その言葉をつかったインスタレーションを発表した。招聘アーティストであるパスカル アンペールとトゥリー ロリタは、織物工場で使うジャガード織の織機からインスピレーションを受けて、映像とサウンドを組み合わせたインスタレーションを展開した。

SIDE COREは、市内の半島にある経ヶ岬灯台に大きなレンズを取り付け、灯台から出る光が夜になると町を見張るような大掛かりなインスタレーションを制作した。この作品のために、灯台を管理する海上保安庁と交渉したり、米軍と日本の合同基地の歴史などを知ったという。このようにアーティスト・イン・レジデンスとは、アーティストたちが町をリサーチし、そこにある文脈や歴史を使って作品にすることであると同時に、町の人たちが普段見慣れている風景や記憶を改めて掘り起こすことでもある。そのうえで展覧会をすることで、鑑賞者が町を改めて再確認できたのではないかと振り返った。

目[mé]の南川憲二氏と荒神明香氏からは、2013～14年に宇都宮美術館と共に行ったプロジェクト「おじさんの顔が空に浮かぶ日」の説明があった。荒神氏が見た「電車の車窓から外を見たら、おじさんの顔が月のように浮かんでいた」という夢から発想を得たこのプロジェクトは、宇都宮市内に住む一人のおじさんの顔を巨大な立体物にして、空に浮かべたと

いうもの。地元のボランティア参加者の協力がないと実行できなかったことや、実際に浮かんだおじさんの顔を見た人たちからさまざまな反響があったという。

こうした話を踏まえて、それぞれ「アートやアーティストが人と関わる時の失敗談」や、「展示が無理（だと思われるような場所をどうやって説得するか」といった話に展開していった。表現の自由についてあれこれ言われる昨今、SIDE COREの松下氏は「ダメかアリかというルールの中に収まるのではなく、苦勞が掛かるが、真摯に自分がしたいことをさせてもらえるかという気がするし、小さなアートプロジェクトの方がやりやすい」、目[mé]の南川氏は「実は表現が自由だったことも不自由だったことも一度もないと言えるのではないかな。だからこそ、それぞれが置かれた状況を突破していくことで、面白いことが生まれるのではないかな」といった意見が出た。

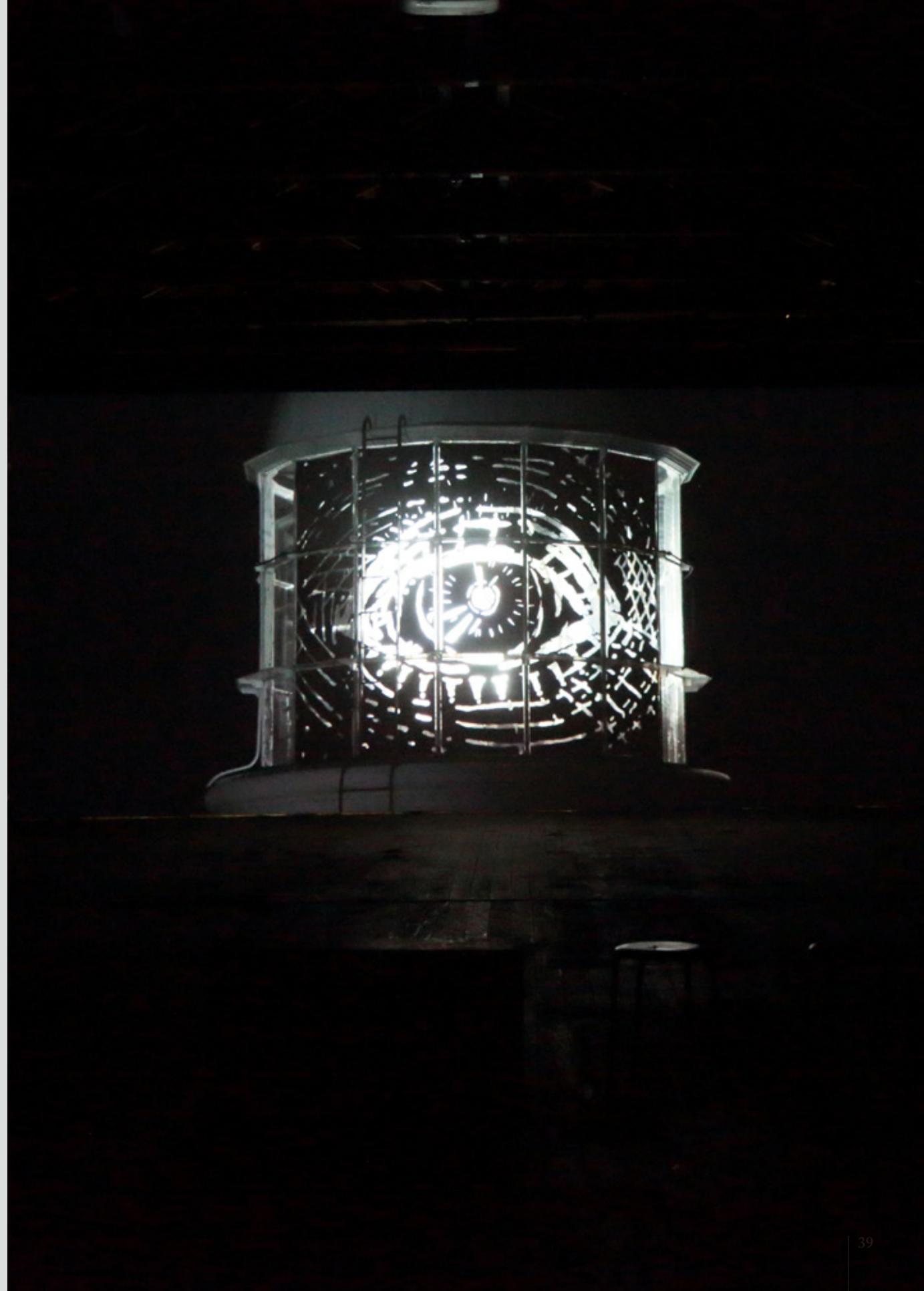
文：藤田千彩

日本博京都府域展開アート・プロジェクト | もうひとつの京都
Japan Cultural Expo in Kyoto Prefecture
Art Project Alternative KYOTO

京都:Re-Search 2019 実施報告書

発行 京都:Re-Search実行委員会
(京都府、亀岡市、京丹後市、和束町)
〒602-8570 京都市上京区下立売通新町西入藪ノ内町
京都府文化スポーツ部文化芸術課内
TEL: 075-414-4279 FAX: 075-414-4223
email: bungei@pref.kyoto.lg.jp
文 藤田千彩 / アートプラス株式会社
デザイン 加瀬部敏志
発行日 2020年3月発行

<http://kyoto-research.com/>
Copyright©京都府



Japan Cultural Expo in Kyoto Prefecture
Art Project Alternative KYOTO
KYOTO: Re-Search 2019

